

# 震災遺構 荒浜小学校



津波襲来前後の体験談ビデオ放映



2011年  
3月11日  
14:46  
震度6弱の地震

荒浜地区にて

津波襲来までの経過を示すパネル展示

「失われた街」模型復元プロジェクトによる『記憶の街ワークショップin荒浜』完成模型

# 荒浜の海岸



失われた松林と防潮堤



赤枠内が復興住宅の建設区域

## 復興途上の閑上地区



復興まちづくり、がんばろう閑上

名取市閑上地区集合災害公営住宅整備事業 設計・監理一任形工事 建設・大規模共同企業体

最後の集合住宅は年末に完成予定



復興住宅内を走るダンプトラック



買い物はコープの配達車で



津波緊急避難は集合住宅へ



慰霊塔と笹かまほこ工場の佐々直 日和山



被災前の閑上 (2011年9月撮影)



嵩上げ上の復興住宅



日和山から見た内陸の復興住宅



閑上港の漁船



名取市バスなとりん号



名取市サポートセンターに併設された『閑上サロン』

# おわりに

今回も建築学会年次大会を大いに楽しませて頂き、ご準備くださった主催関係者には感謝致したい。

☆口頭発表のセッションでは、地震被害調査・地震防災・地盤震動・強震動評価などの研究発表を聴かせて頂いた。

☆建築紛争フォーラムでは仙台地裁判事の基調講演が興味深かったが、建築学会の建築紛争処理における司法支援の在り方には、相変わらず疑問が残ったままである。建築業者間の紛争については、建築業界・学界の中立的な立場から司法支援(建築の専門知識による裁判官の支援)は可能かも知れないが、一般市民と建築業者との紛争となると話は全く違うのではなからうか。

☆記念シンポジウム『祈りを包む建築のかたち-福島・世界を念(おも)いながら-』では、主催者の「祈念碑や災害遺構、宗教建築を論じるつもりはなく、生活の内なる念(おも)いを祈りと呼び、建築にできること、なすべきことを考えたい」との意図が、どの程度参加者に理解されていたか疑問であった。フォトジャーナリスト・安田菜津紀氏の基調講演の、ご自身の身近かな方々の陸前高田での津波被災体験に始まり、シリア内戦に苦しむ人々に接した経験も踏まえつつ、津波災害の被災者の生き方に寄り添うと云うジャーナリストとしての行動様式には共感を覚えた。

☆地盤震動地域交流会では、東日本大震災の震災アーカイブの構築や仙台市の震災伝承の取り組みについての話題提供があり、津波で被災した仙台市立荒浜小学校が震災遺構として保存されることになった経緯についても紹介があった。

☆陸奥国分寺跡には新たに『ガイダンス施設』と『天平回廊(再現)』が建設されていた。展示資料を頼りに七重塔跡を散策していて、心礎(塔の心柱を支える礎石)を見つけた時には感動を覚えた。

☆震災遺構になった荒浜小学校を初めて訪ねたが、校舎4階の展示内容は予想以上に充実したものであった。当時の校長先生が津波襲来前後の体験談を語っておられるビデオも放映されていた。『荒浜の歴史』という貞山堀近くの記念碑を見ている母娘のお二人に声を掛けたところ応じてくださり、震災時のお話を伺うことができた。「自宅は最も海岸に近い松原の前にあった。地震の直後に防災行政無線で10メートルの津波が予想されているとの連絡があり、すぐさま車で七郷小学校に避難した。すぐに帰れると思っていたので何も持たずに避難したことが残念でならない。今朝ほど発生した北海道地震の被災者のことが気の毒でならない」などと話してくださった。海岸の慰霊碑や新設された防潮堤には車で訪れる人々の姿が絶えなかった。

☆一方の名取市閑上地区では、相変わらず嵩上げ工事が行われていたが、居住区には市営の集合住宅や戸建て住宅が次々と建設され、すでに居住者も多くおられた。名取駅からは市バスが利用できた。市営住宅の1階にあった名取市サポートセンターの『閑上サロン』では、管理組合の副会長さんやその場にいらした皆さんから種々のお話を伺うことができた。「市営住宅は昨年7月から12月に完成した。戸別住宅も市営と自立復興の両方がある。集合住宅の7割が独居で、平均年齢は68歳。こうした集会所は是非とも必要」とのことであった。